

魔法少女が狼怪人に負けて

よめ
氏族入りさせられる話



目次

○登場人物紹介（3ページ）

○本編 前編（4ページー94ページ）

○付録① ..時代観コラム（95ページ）

○付録② ..キャラクター設定資料（96ページ）

○本編 後編（97ページー207ページ）

○オマケ（208ー214ページ）

○付録③ ..時代観コラム（215ページ）

○あとがき（216ページ）

■ 登場人物紹介 ■

- ・銀塚細華。ぎんづかさいか。JC2。茶髪ロング。美少女。
- ・シルバー・ヘッジホッグ。銀塚細華の魔法少女の姿。紫髪ショートカット。レイピアを出す魔法を使う。
- ・ヴォルク。怪人。魔法少女の敵。狼型の獣人。黒毛。耐久力に優れ、頑丈である。
- ・デルタ。魔法の国からの使者。人類の味方。銀塚細華を魔法少女にした。フクロウの姿をしている。

※①本作品はフィクションです。登場する人物、団体、名称等は実在のものとは一切関係ありません。
また、本作品は成人向けの内容を含んでおります。18歳未満の方の閲覧・購読は禁止されています。
本作品の閲覧・利用により生じたあらゆる影響や責任について、当方は一切の責任を負いかねます。
予めご了承ください。

※②本作はサイトへの勝手な転載・翻訳・複製を禁止しています。

また、本文をAI学習に使用することも禁止しています。

本編（前編）

「助けてえ！ いやあ！うごかないでえ！」

「ひひ、きもちいいなあ」

コンクリートジャングルの中。

乙女の叫び声が響き、それを受け取るものがいた。

「そこまでよ、怪人！」

「あ、いやあ……、た、助けてえ……」

「んう？ おつ、ようやく来たか。来るのがおせえな、魔法少女」

とある路地裏。都市はすでに眠りにつき、光より闇の方が多く占める丑三つ時。

灰色の犬毛で、全身毛むくじやらの犬人。身長は2メートル近くあるうか。

彼はグロテスクな雄犬棒を携え、白濁液と共に「女性器」から引きずり出した。

犠牲者たる女性は、夜遊びしていたJKのようで、可愛らしく整った彼女の顔は、すっかり泣きはらし、凌辱による屈辱でぐちゃぐちゃになっている。

制服の紺のスカートだけが腰回りに残っており、他の衣類は残骸となり、そこら中に散らばっている。

JKの黒い髪は乱れ、床に広がっている。そんな彼女の「アソコ」からは、赤い真紅の線が太腿を伝う。

初体験を、このような場末で散らした上に、酷く凌辱されたのだ。

「今しがた、乙女の純潔を奪って、一回戦愉しんだところだ。魔法少女。お前も生娘だろう？ お前の処女も貰いたところだなあ。力がもつと増える」

「っ！ 本当に下劣な下衆め。力任せに乙女を強姦し、楽しむなんて非道きわまりない！ その女性もすぐく苦しんだんじゃない」

「く、くく。俺は楽しかったけどなあ」

ニタニタ。犬人は口元を歪め、それは楽しそうに涎をふく。

情事の最中に、半開きだった口のせいで溢れた唾液だった。

「そうは言っても、こっちの空気は魔力が薄くてしかたねえんだわ。生きるために魔力を手に入れる必要がある。それでも殺さないだけ有情で……うお」

犬人——怪人と呼ばれた為に犬怪人というべきか——犬怪人から魔法少女と呼ばれた少女の姿が月光に照らされる。

少女の手に握るのはレイピア。刃渡りは1メートル前後。一般的な長さだ。

細身の剣身は高速移動によりブレ、身体のシルエットも残像を残して、銀色の尾を引くように瞬身すると、いつの間にか犬人の前に現れ距離を詰めた。

毛むくじやらの肌の、喉笛を切り裂きかけた。

「あぶなっ……うお」

犬怪人の動体視力は確かに捉えた。

至近距離で魔法少女の姿がよく分かる。

白いノースリーブワンピースっぽいドレス。丈は膝下ほどであり、腹部の布地の表面には紫色の拳大ほどの宝石が一つある。そんな宝石と同じく少女の髪色は紫色であり、髪の長さはショートカットだ。

身長は155センチ前後。

中性的な顔立ちで、一見すれば美少年とも美少女とも見てとれるほどに——とても整っている。年は十代半ばから十代後半といったところ。

腕には白銀の籠手がつき、胸元にも白銀の胸当てがついている。全身を覆うような鎧からすれば、最低限の防具であるが、どこか佇まいや装備の意匠からは、騎士を連想させる。

脚は銀色のラインが一本入っている白いニーソックスを履き、膝まで覆う銀の足甲が覆っていた。

「犬怪人、しね！」

ひゅっ。ひゅっ。騎士風の少女の手に握られたレイピアが舞う。

しかし、それは空を切る。その度に犬怪人は回避していた。動体視力は剣の動きも捉えていた。

「ちっ、やりにくいな……！（だが、逆に——）」

目が捉えているからといって、避け「続ける」ことが容易いことではない。

次第に回避は続かなくなる。

「今！」一つのタイミングを隙と捉え、レイピアを突き上げる少女。

「そう……かな！」

ずぶ。しゅつ。犬怪人は拳を広げて、レイピアを受け止めた。掌の表面の一点が串刺しになる。犬怪人は手の表皮を貫通されたことに、顔を顰めるが、それでも動きは止まらない。次の動作を優先する。痛覚を無視して、目的を果たす。覚悟した痛みはまだ耐えられる。

「（こつちがとらえた！）」ニヤリと内心でほくそ笑む犬怪人。

そのままレイピアの劍柄元を掴みにいこうとする。しかし、掴んだのはレイピアだけで、少女は距離を取る。少女の手元が空手となり、その掌を見つめ、顔を別の意味で顰める。怪訝げにしている。

「（獲物を手放した？ 唯一の武器なんじゃないのか？）」

犬怪人は状況を整理する。戦闘中の情報を考察する。

路地裏。時刻は深夜。手には刺さったままのレイピア。

援軍無し。敵の奇襲の気配も無し。魔法少女の手は空手。

「おいおい、武器を捨てちゃあ、勝てないだろ」

「問題ない」

少女のクールな面持ちは崩れない。

軽口に動じない、少女の手には新しいレイピアが作られていく。

武器の生成には神秘の力「魔力」が使われている。

魔力。魔法少女の源にして、怪物・怪人の生命の源でもある異次元^{エネルギ}の力。

同時に怪物・怪人は人から奪うこともでき、夜に夜に犠牲者が増えるのだが――。

新しい武器が生まれたのを見てから、犬怪人は舌打ちをする。

そのまま自らの掌を貫いていたレイピアを引き剥がす。それを投げ捨てると、路地裏にぐろんと転がっていく。消える様子はない。

「……お前の呼び名、なんて言われてるんだ？」

呼び名。

魔法少女は本名を使わない。

それゆえに、仲間がつけたり、あるいは自称したりする。

『銀針^{シルバー・ヘッジホッグ}鼠』……銀のハリネズミ。もちろん、そうなるのはクスゲス野郎の、あんたの方だけど』

「おいおい……敵の倒し方を名付けするなんて趣味悪いな」

レイピアの痛みを連想する。チクチクとした痛みは鋭い痛みに変わる。ハリネズミにされる。

それは背中から生えている本当のハリネズミを連想する。怪人は与えられた知識――仮初の知恵^{もの}であるからこそ、知性を呪う。

犬怪人の首筋を冷や汗が流れた。

☆ ☆ ☆

「はあはあ……（意外と耐久……時間がかかった）」

「くそっ……がつ……」

サラサラサラ……。

身体中にレイピアが突き刺さり、人間剣山あるいは人間ハリネズミと化した犬怪人は傷の多さからくる魔力漏出により消滅。人間で言う出血多量に等しい。

魔法少女シルバー・ヘッジホッグ——銀塚細華。ぎんづかさいか彼女は深呼吸する。

超スピード特化で、耐久性と持続性に難ありの魔法少女性能。スデーター

今の犬怪人のような「怪人型」はタフだ。最近新しく現れた強敵。

銀塚細華は常々疑問だが、怪人は地球の生き物を素体になっているようで、生き物を下地ベースに形成しているおかげか、身体が頑丈であった。やりにくい相手だ。

話は戻すが、銀塚細華はタフな相手を苦手としている。精密なコントロールも可能なおかげで、核や弱点を持つ相手にはめっぽう強いが、心臓や生命の核を一突きしにくい相手には弱い。持久戦を強いられる。

「だ、大丈夫っ？」

「ううっ……………」

銀塚細華は犠牲者の少女に駆け寄る。

まだ動けない彼女に施そうとするのは「回帰」。

犬怪人に犯される前にまで身体と記憶を巻き戻すことができる。

犠牲者救済システム。

それを行うために「~~天~~」に歩み寄ろうと近づく。

「！！」

ずりっ。近くで物音が聞こえ、はっとなる銀塚細華。

「おっと、よけたか」

微かな足音。銀塚細華の「勘」が警鐘を鳴らした。一足で2メートル近く離れた瞬間。

ぼごんっ。先程まで彼女が立っていたビル近くの壁が凹む。路地裏に一つの破壊音が鳴り響く。

凹んだ壁近くに、その破壊をもたらしたものが立っていた。

先程の犬怪人に酷似した顔立ちを持つ黒毛並みの犬怪人——否、狼怪人ともいうべき者が立っていた。

犬怪人が2メートル前半ほどの身長に対し、こちらは190センチ程だが、程よく引き締まって

コンパクトになっている筋骨隆々の身体は、狼怪人の方が強者の「それ」の雰囲気を含れさせていた。

長い狼頭。長尖耳をピクピクと動かし、鼻を小さく鳴らす。

そのまま横についた狼眼をぐるりと左右で動かし、右目だけが移動方向へと向く。

「(……………ちよつと目で追えてなかった)」

そもそも銀塚細華は狼怪人の動きを目で追えていなかった。

微かな物音で先読みして、その場から離れただけに過ぎない。

「見えていたか」

「(返事はしない)」

「聞こえてないのか、魔法少女」

「聞こえてるわよ」

「良かった。耳無しかと思った」

「あんたはよく聞こえそうね」

銀塚細華は転がっていたレイピアを爪先に引っ掛ける。

そのまま慣れた感じで蹴り上げる^{リフティングする}と、手に持つ。

刺さらずに蹴り上げている仕組みは手元から離れても、自らの武器に魔力をまた「流^{そそいで}して」、剣先を無害化させて、手にとってから、また武器化させている。

彼女は、それくらいの ON/OFF はやってのけることができる。

「よく聞こえるとも。聞こえるすぎるくらいだな」

「……………へえ？」

「弟の断末魔が聞こえた。魂の叫びだ。死んだんだな、あいつ」

弟。銀塚細華の耳には、確かにそう聞こえた。

この場に狼怪人に酷似していたという存在を指しているのであれば、間違いなく犬怪人しかない。

「弟ってあの灰色の毛のやつ？」

「そいつだ。やっぱりお前か」

銀塚細華を見据えた狼怪人は、目を細めていく。周りの空気がピリついていき、明らかな怒気を、身体から発散させていることが分かるほどに。

怖い人と——身近な恐怖でイメージすれば怒った時の父親や強面の人物の——対峙した時の場面をもっと100倍にさせたようなプレッシャー。

何か変なことを言えば、殴られたり、コロされるのではないかと連想させる。

原始的な恐怖。

魔法少女でなければ、その怒気にあてられ、身が竦み、戦うことすら不可能であろう。

レイピアを強く握り、相手の出方を伺う銀塚細華。

戦える相手かどうか。

狼怪人の底は見えない上に、苦手な持久戦をしたせいで、消耗している身というのも悪い状況だ。助けが来るかも分からない。

魔法少女は基本的に犠牲者の声を聞きつける形で場に現れる。

助けの声を拾い上げることが得意だ。

あるいはパトロールのように巡回している最中に、敵を見つけたりすることで場に現れる事が出来る。文明の利器を使い、仲間内で呼び出すこともあるが、それは余裕がある時だ。今は余裕がない。

「弟の仇を取らせてもらおうか。馬鹿な犬畜生だが、それでも生まれて一ヶ月。ずっと血の繋がりを感じていたんだ。そもそも、魔力の相似性はあいっただけなんだな」

「(相似性?) アイツ、弟だったの。よく舐けておいてよね」

「ああ、そう言われると頭痛がしてくる。後先考えずに今日出かけて行って、このざまだ」

「ご愁傷さま」

「そっくりそのまま返すでしょう。見た所、お前は弟との戦闘で息が上がっているようだが」

「……ちっ」

凶星であるが、顔には出ない。

こういう時のクールな面持ちと、動揺が顔に出にくいポーカーフェイスであることに感謝する少女。

「万全ではないだろう。右半身にダメージも受けているな。内出血してる箇所から『自動回復』する匂い

がするぞ」

「……っ」

「じゃあ、いくぞ。全力でこい」

今度は銀塚細華が冷や汗を流す番だった。

☆ ☆ ☆

公共の敵。パブリック・エネミー。怪物や怪人に対する呼称はパブリミ。

安直だが、魔法少女達の間ではその名前で通っている。

「んむぐぐぐ（苦しい！）」怪物に襲われている少女。

「やあ！」怪物を斬り伏せる銀塚細華。

『GIIIIIIIIII』断末魔を上げる怪物。

怪人型の化け物が出てくる前は楽勝だった。

銀塚細華は若い乙女に絡みつき、自由を奪っていた化け物の触腕を切り裂いて退治した。

怪物には種類がいる。

いくつもの細い触腕を持つバレ—ボールのような胴体を持つ「触手の怪物」や「不定形^{スライム}の怪物」、

1

メートルくらいの細いフォルムの身体で吸着してくる「細身の怪物」、人の手を大きくしたような「大手の怪物」といった四種類の怪物が、2〜4体で徒党を組んで、女性を襲っていた。

彼らは殴ったり蹴ったりする物理には強いが、「魔力で出来た武器」、魔力を「火」に変えるような「魔法」あるいは「魔力」をただ飛ばすだけの手段の「他の者の魔力」には滅法弱かった。

つまりは「雑魚」だった。後年では「雑魚型」と呼ばれる怪物達^{バフミー}。

しかし、最近になって、地球の生き物をモチーフにしたような「怪人」が現れてからは苦戦を強いられることになる。

先に先述したように、怪人達は魔法に強く「雑魚型」に比べると頑丈^{タフ}だったからだ。

物理的な殴りに強い魔法少女が活躍するのも、怪人型が増えてからになり、単独行動していた魔法少女でさえもタッグを組むようになるのも、この頃となる。

だが、残念ながら、魔法少女の方からも犠牲者が出るのは今、この時期であり、

銀塚細華は「最初」の犠牲者となる。

色んな意味でだ。

☆ ☆ ☆

「割と強かったな。よかったぞ。お前」血を地面に吐き捨てる狼怪人。

「ごほつ。……どーも。さつさと殺れば？」

「気が変わった。お前は犯す」

「ちっ……」

路地裏は、嵐でも過ぎ去ったかのような破壊痕が、そこら中に残っていた。爪痕と殴り痕、それと折れたレイピアの残骸等。

綺麗な乙女の頬は青黒く腫らしていたが、時間が経つと、テレビの逆再生のように治っていく。

超常の現象。

『自動再生^{リジエネ}』。便利だったな。魔法少女のモットーに則してるんだったか。なんだけ、『エロく可愛く』だったか」

『綺麗に可愛く』よ、死ね」

「ハハハ、まだ元気があるな。いいぞ」

銀塚細華の顔、魔法少女の華たる相貌が最優先で治されると、激痛の広がる全身には、じわじわと回復が広がる。そのせいで戦闘継続できないくせに、口応えできる程度には元気になってしまう。それがとても

恨めしい。

ワンピースっぽいドレスの全体的なシルエットは無事だが、所々に破れが見えている。紫色の短い髪も、戦闘のせいですっかり乱れていた。

ぐぐぐ。銀塚細華はぐったりとした体を壁に礫にされる。

両腕を万歳するように頭上に上げてから、その後、×字に手首が頭の上で交差する。

彼女の細腕の手首は押さえつけられてしまう。これで捌られるだけの肉人形となるだろう。

完全に回復する時間は180分後程。

ばきん、からんからん。

銀塚細華の「籠手」が外され、胸当ても外される。ワンピースっぽいドレスには胸元のラインがはつきりと浮いており、双丘の先端も浮かび、乳首がどこにあるかは明白だった。

両方ともに半壊し、防具の体を成していなかった。

びりっ。ワンピースの胸元が破かれる。

ぶるっ。白く慎ましい膨らみのある乳房がさらされる。

手のひらに収まるちょうど良いサイズ。美乳であった。中性的な美少女についていて、美乳である上に、男なら吸い着きたくなるほどに綺麗な肌までしている。

「くっ……」

肌が晒され、屈辱感を味わう。

クールな面持ちのまま、愛らしく頬が微かに色づく。

この時ばかりは少女性がチラつく。表情は悔しそうであるが、涙目ではない。

強い反抗の瞳。

「可愛いもんだ」

「み、みるな」

同じ年の男子にも晒したことのない肌。

それを敵に見られ、嫌悪感は殊更強く燃え上がる。

見るんじゃない、お前に見せるべき肌ではない。

そう言いたげに睨みつけるが、そんな視線こそ狼怪人の感情を煽っていく興奮となる。
スパイス

ぺらっ。ワンピースの前面の上半身布部が破かれた後、スカートが捲られる。腰布からは薄い紫色の下着
ショーツ
が露わになる。

スカートは破らず、わざと残しているような感覚を覚え、舌打ちする銀塚細華。

「ほう、紫色か。唆られる色だ、嬉しいね」

「誰があんたなんかを喜ばせるもんですか」

「減らない口だな」

ここまで鉄面皮を貫いてきた銀塚細華であつたが、さすがに反応が続く。

顔をもつと赤面する。唇をきゅつと噛んで、恥辱に耐える。

弱音を吐かない様子に、狼怪人は小さく笑う。

勝利者ゆえの余裕ある笑みであつた。

「ここで、やめて下さい、とか。見逃してあげます、とか言わないのか？」

銀塚細華は狼怪人の口ぶりに舌打ちする。

「言つたところでやめないし、止める気もないでしょ？ 下衆。あんたを喜ばすつもりはない」

「くくく。殊勝だな。そんな余裕を持てるとは。だが」

「……つ、あ、……、このっ」

狼怪人は薄紫ショーツの端に太い毛むくじやら獣指を引つ搔け、強引に下ろそうとする。

銀塚細華の精一杯の抵抗。足を閉じて、下着を下ろそうとするのを妨害する。

「健気だなあ」

「う、うるさい」

「だが、これ以上抵抗するな。そこに転がつてる小娘をやるぞ」

「……………」

気を失っている犠牲者の少女。この場で一番最初に犬怪人に襲われ、処女を散らされた可愛そうな人物。彼女の身と心は穢されただけでなく、狼怪人の強姦のための人質とされようとしていた。

狼怪人の言う言葉はもつと犯すという意味なのか、それとも命を絶つという意味なのかはわかりかねる。最悪の場合は後者だ。

「……その子には手を出さないで」

銀塚細華は犠牲者に同情的で、弱々しく告げる。しおらしい言葉遣いは狼怪人を唸らせる。その方向性で弱い部分を突いていく、という発想に転がりこむ。

「なら、するべきことがあるよな？」

「……ちっ」足の力を抜く銀塚細華。

「それでいい」にちやあと笑う狼怪人。

ぐいぐい。するっ。そのまた下着を指に引っ掛けて下ろす行為に対して、かかっていた抵抗が消える。するすると下に降り、太腿まで降ろすと、そこからは、下着が地面にストンと落ちる。

無意識に足を閉じる白肌の生脚。

意外とほっそりとしているが、肉付きは健康的である。

また恥丘は無毛であり、少女性を強める光景だった。

「閉じるな」

「……………」

「おい、足を開けよ」

「……クソ」

足を揃えたまま、くの字に曲がり、下腹部を隠すようにしていた脚であったが、少しずつ足が開かれる。しかし、開脚の開きは小さい。

「もつとだ」

「……………しね」

ぱっかり。綺麗な美脚は自らの意思で大腿に開かれる。下着に隠れていた少女の花卉が露出する。ぴったりと貝のように閉じ、一見すると未成熟な女陰おまんこが現れた。

一切遊びがない純粹無垢性を思わせる女の園。

「綺麗なものだ」

「しね、くたばれ、馬鹿」

「ふふ、怖い怖い」

「……………（い、いたあ）」

強引に獣指が乾いた大地にあてがわれる。乾いた指先は互いを傷つけあう。潤いのない大地の方がダメージを受けるのは必定。